

論文

## 明治時代の京都でのイギリス人旅行者の神社仏閣めぐり —イギリス人の旅行記に描かれた京都の特別な寺々—<sup>1</sup>

長谷川 雅世  
(高知大学教育学部)

British Travellers' Visits to Shrines and Temples in Kyoto in the Meiji Period:  
The Temples Specially Mentioned in Their Travel Writing

Masayo HASEGAWA  
(Faculty of Education, Kochi University)

### ABSTRACT

After the first Kyoto Exhibition in 1872 (Meiji 5), more and more British people were allowed to visit and travel in Kyoto. The travellers left many accounts of the city, often referred to as 'a city of temples' or 'the religious metropolis,' where they spent much time touring the shrines and temples. Whilst a number of religious sites were popular tourist attractions, some such as the Hoko-ji, Sanjusangen-do, Kiyomizu-dera, Chion-in, and Nish and Higashi Hongan-ji temples were regarded as especially worthy of description in their travel writing. This essay discusses why these six temples were considered special or remarkable by British travellers, and in doing so aims to provide a depiction of their tourism in Kyoto in the Meiji period.

British travellers believed that each of Hoko-ji Temple and Sanjusangen-do Temple was unique by reason of its huge image of Buddha, big bronze bell, or hall containing numerous statues of a Buddhist deity whilst most other temples had a monotonous identity and lacked originality. The Kiyomizu-dera temple attracted them not only because of its uniqueness but also because of its picturesque beauty, and the Chion-in temple was visited by many British people largely because it was located near to many Western-style hotels as their accommodation. The Nish and Higashi Hongan-ji temples received a great deal of attention from British travellers, especially those interested in religion in Meiji Kyoto and Japan. These reasons why British tourists considered the above temples as deserving of special mention reflect how they travelled and what they expected to see in Kyoto in the Meiji Age.

はじめに

明治初期の日本では、原則として外国人は外国人居留地から十里（約 40km）四方内しか外出できないという厳しい内地旅行の規制があり、彼らは国内を自由に旅することができなかった。しかし、1875（明治 8）年に「外国人内地旅行免状」が発行されるようになり、外国人の日本国内旅行が可能になった。ただし、それを取得できるのは特権的立場にある者だけだった。その後内地旅行の規制は徐々に有名無実化していき、最終的には 1899（明治 32）年にすべての外国人が日本国内を自由に旅行できるようになった。

京都に関しては、「外国人内地旅行免状」が発行される少し前に変化があった。東京遷都以降に京都が衰退していくのを背景に、1872（明治 5）年に京都の復興・発展を目的とした京都博覧会が開催され、以降それは毎年行われた。京都の産業や経済発展のためのこの博覧会では、外国人の来場が重要視されており、そのため博覧会開催にあわせて外国人の入京が特別に許可されるようになった。当時の状況を 1918（大正 7）年の *The Japan Chronicle, Jubilee Number* は、外国人は「京都には二十五マイル以内に近づくことが許されず」、そのために「1872 年までに京都に入ることができた外国人は全部で 10 人前後もいただろうか」（堀・小出石 183）と語っている。そして、1872（明治 5）年に状況は変わり、「この年政府は、この国最初の博覧会を京都で開催し、一般の外国人にも見物を許可した。この時から外国人の京都訪問の許可証が手に入れやすくなった」（ibid. 184）と伝えている。実際に、第一回京都博覧会にはイギリス人多数を含む 770 人にのぼる外国人が来場した（丸山 99）。これ以降京都を訪れるイギリス人旅行者の数は増え、彼らは京都での体験を自らの旅行記に綴った。

明治時代のイギリス人による旅行記では、京都はしばしば西洋化されていない「昔ながらの日本」（Bates 1889, 155; Knollys 1887, 277; Lawson 1910, 100）や「芸術の都」（Bird 1880, 2: 220; 225; Ponting 1910, 4: 40-67）や「自然美豊かな街」（Bird 1880, 2: 224; d'Anethan 1912, 579; Ponting 1910, 4）として描かれる。しかし、これらと同等に、あるいはこれら以上に強調されている京都の姿があり、それは「宗教都市」としての京都である。

そして、その「宗教都市」での観光の中心には神社仏閣めぐりがあった。その結果、イギリス人の旅行記には多くの京都の神社仏閣の名前が登場するが、それらのなかに名所中の名所や特筆すべき場所として扱われている場所がある。それは、方広寺、三十三間堂、清水寺、知恩院、そして西本願寺と東本願寺である。そこで本論文では、あまたある京都の神社仏閣のなかで、イギリス人旅行者にとってこれらが特別だと感じられた理由を考察

する。そしてそれを通して、彼らが体験した明治時代の京都観光の一端を再現できればと思う。

## 1. 宗教の中心地という京都のイメージ

イギリス人の旅行記で京都はたびたび「神社仏閣の都市」（Dixon 1882, 581; Sladen 1904, 384; Tristram 1895, 195）や「日本の宗教の中心地」（Lawson 1910, 31; Tristram 1895, 195）と呼ばれる。ウェールズの牧師 Joseph Thomas（1897）の場合は、「京都が『極東のローマ』という呼称を望むのも当然だ」（151）と言い、京都をヨーロッパにおける宗教都市の代表格であるローマに喩えている。彼の言葉からも、京都が宗教都市としてのイメージを強く持っていたことがわかる。

京都が「神社仏閣の都市」というイメージを与えたのは、主として社寺の数の多さゆえである。そして、水彩画家の Walter Tyndale（1910）は、それらにこそ京都の美しさがあると感じ、旅行記のなかで「京都の街の美は主に人々の住まいにあるのではなく、彼らが崇める神々の住まいとその周囲の神聖なる木立にあるのだ」（46）と述べている。

さらに、イギリス人旅行者は、建造物にだけでなく京都の日常生活のなかにも「日本の宗教の中心地」としての京都の姿、換言すれば、「宗教的に伝統的な日本」の姿を感じていたようだ。例えば、1897（明治 30）年に来日した Leonard Smith（1900）は、京都は「若いライバル」である東京よりもかなり「古風」であるという感想を述べ、そのように感じた理由として、街の中心部に路面電車が走っていないことのほかに、街角で見かける托鉢僧の姿を挙げている（122）。さらに、東本願寺を訪れた際には多くの参拝者を目にしたと記し、「おそらく、これは京都の『古風さ』のさらなる証なのだ」（129）と述べている。Smith よりも早い 1891（明治 24）年に日本を訪れた Mary Bickersteth（1893）も、京都と東京との比較、そして「駅舎を去った瞬間から、この街が日本の新しい生き方にどれほど影響を受けていないのかわかりました」（141）という言葉で京都の描写を始め、東京などの都市とは違って京都がいかに西洋の影響を受けていないのかを語っている。続けて彼女は、「宗教関連の市が街の多くの場所で開かれていて、通行人の群れのなかにたくさんの僧侶の姿があり、これらのことは日本の古くからの宗教と社会風習が未だに人々に与えている影響力がどれほど大きいのかを示しているのです」（141）と述べ、京都が宗教的にも西洋化されていないことを伝えている。Bickersteth は、国教会伝道協会（Church Missionary Society）の日本主教として布教活動をしていた兄に会うために、エクセター主教である父とともに来日した。彼女自身も敬虔なキリスト教徒だったので、

京都の異教の雰囲気がより印象的だったのかもしれない。

## 2. 宗教都市としての京都での観光

「神社仏閣の都市」や「日本の宗教の中心地」と呼ばれる京都では、観光の中心は神社仏閣めぐりであった。明治時代に出版された代表的な外国人向けの旅行案内書で、京都で訪れるべき場所として挙げられているほとんどが神社仏閣である。例として、1881（明治 14）年出版の Earnest Satow & Albert Hawes による *A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan* の 1884（明治 17）年改訂版<sup>2</sup>を見てみよう。この旅行案内書は、イギリスのマレー社が 1891（明治 24）年に出版したマレーのハンドブック・シリーズの日本編である *A Handbook for Travellers in Japan* のもとになった案内書である。マレーと言え、当時、英語圏のガイドブックの代名詞のように使われていた。そのガイドブックの種本になったことから、Satow & Hawes の案内書が、英語で書かれた日本案内書のなかでいかに重要な位置を占めていたかがわかる。実際に、その案内書が発刊された年に来日したイギリス人商人 Arthur Crow（1883）は、彼自身の旅行記で何度も Satow & Hawes の案内書に言及し、それが旅の貴重な情報源だったと述べている（ix）。

この旅行案内書は以下の場所を京都の名所として挙げているが、ほとんどが神社仏閣である。

東山南部	稲荷神社、東福寺、万寿寺、泉涌寺、三十三間堂、大仏殿（方広寺）
東山中部	西大谷、清水寺、八坂の塔、高台寺、東大谷、祇園社（八坂）、知恩院、建仁寺、將軍塚
東山北部	南禅寺、永観堂、黒谷、真如堂、銀閣寺
中央北部	京都御所
北部郊外	平野神社、北野天神、金閣寺、等持院、御室御所（仁和寺）、上賀茂神社、下鴨神社、修学院離宮、広隆寺
中央南部	二条城、東寺、西本願寺、東本願寺、興正寺、本圀寺
嵐山	嵯峨釈迦堂（清涼寺）、嵐山、天龍寺、桂川の急流
その他郊外	藤の森神社、萬福寺、平等院、比叡山、愛宕山、鞍馬山、男山八幡宮（石清水八幡宮）

（サトウ 1884, 115-67）

Satow & Hawes の案内書は京都観光のモデルプランも提案していて、それは以下の通りである。

6 日間の京都観光計画	
一日目	京都御所、西本願寺、知恩院、清水寺、祇園
二日目	修学院庭園、銀閣寺、金閣寺、下鴨、黒谷、御室御所
三日目	嵐山と桂川の急流
四日目	比叡山登山
五日目	琵琶湖、唐崎の巨木、石山寺
六日目	東本願寺、東寺、三十三間堂、稲荷神社
京都の町を一望できるのは將軍塚	

（サトウ 1884, 111）

旅行案内書で挙げられている観光名所や観光プランを見てみると、明治時代に京都を訪れたイギリス人が、数多くの神社仏閣をめぐることに時間を費やしていたことが想像できる。実際に、彼らは一日に幾つもの社寺を見て回っていて、旅行記でそれらの名前を列挙している者もいる。

だが、このような京都観光に不満を漏らしているイギリス人は少なくない。そのひとりが、1891（明治 24）年に、大阪で宣教師かつ教師として働く娘に会いに、そして日本での布教現状を知るために来日した Henry Tristram（1895）である。彼は旅行記のなかで、京都での「忙しい寺院めぐり（temple-trotting）」が雨で中断されたことを「残念には思わなかった」と言い、その理由を「二日間のあいだに見た数えきれないほどの仏陀像と何千もの観音像がひどく私を疲れさせていた」からだ」と説明している（208）。そして、「いくらすばらしい芸術品でもあまりに多く見すぎると単調に感じてしまう」（208）と締めくくっている。Walter Dickson も同じように、歴史書 *Japan* に続き 1889（明治 22）年に出版した日本案内記 *Gleanings from Japan* のなかで、「京都にあるすべての寺を立て続けに訪れることはいくぶん辛く、また混乱してしまうと告白しなければならない」（292）と言っている。Tristram と同年に日本を訪れた Howard Vincent の妻 Ethel Vincent（1892）は、「京都には大仏、梵鐘、尖塔、御所、庭園、僧院、特に寺があります」（186）と述べ、続けて、「寺に関して言えば、私はこのころには完全にうんざりし飽き飽きしていました」（186）と記している。彼女の場合は京都に来る前からたくさんの神社仏閣をめぐり、京都観光を始める前からそれに辟易していたようだ。それゆえ、彼女は「鳥居を目にするとうんざりしながらそれを避け、山門から足早に逃げ出した」

(186)。Tristram や Dickson が見たと言う仏像や寺院の数には誇張があるかもしれないが、彼らの言葉からも旅程には多くの社寺見物が詰め込まれていたことがわかり、これが彼らをうんざりさせた原因のひとつである。

さらなる原因としては、Ethel Vincent (1892) の言葉を借りれば、ほとんどの社寺が「似たりよったりで独自性に欠けている」(186) と感じられたことが挙げられる。1880 年代に約 1 ヶ月間日本に滞在した旅行家 William Barneby (1889) も、京都についての記述のなかで、「全ての寺院には似たところがある」(213) と言っている。また、日本の建築や美術をヨーロッパに紹介し、当時のジャポニズムの旗手とも呼ばれる工芸家 Christopher Dresser (1882) は、1876 (明治 9) 年に来日した際に京都を訪れたが、彼の目にも京都の多くの仏閣は個性を欠いているように見えたようだ。彼は、清水寺と三十三間堂と西本願寺を含む幾つかの寺を記述した後で、「私たちが訪れたほかの寺はここまで記述してきた寺ほどの面白味はなく、酷似しているので、それらについて述べるのは無駄である」(146) と語っている。このように、少なからぬイギリス人が京都での神社仏閣めぐりに倦み、そして彼らは「無数の寺院について『無駄に繰り返し描写すること』」(Bates 1889, 165) が、自分たちが京都観光で感じた嫌気を読者に追体験させることになり、旅行記が「体系的」(Jerningham 1907, 104) にならないのではと危惧した。その結果、Dresser の著書のように、京都の神社仏閣についての記述が特定のものに限定されている旅行記は多い。

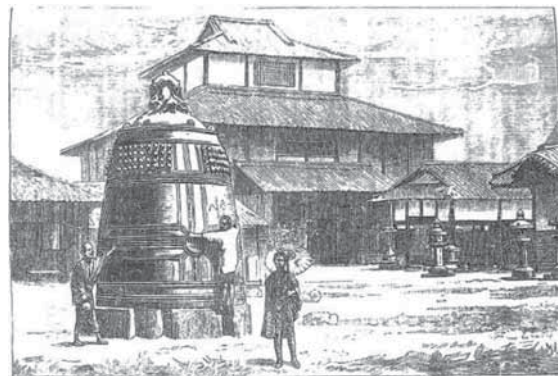
イギリス人旅行者が特筆すべきと考え、彼らが旅行記で描写している寺社は、彼らの趣向や関心の違いによって多少の異なりはある。だが、多くの旅行記に共通して登場する場所があり、それが方広寺、三十三間堂、清水寺、知恩院、西本願寺、そして東本願寺である。そこで本論では以降、あまたある京都の神社仏閣のなかでこれらの場所が特別だと見なされた理由を考察する。

### 3. 個性を持つ寺一方広寺と三十三間堂

まずは、Mary Bickersteth (1893) の旅行記で、京都滞在 5 日目に訪れた「京都で最も有名な寺の幾つか」(153) として紹介される方広寺と三十三間堂について考えてみよう。結論から先に言えば、これらが記述するに値すると見なされた最大の理由は、イギリス人旅行者にとって、「似たりよったりで独自性に欠けている」京都の多くの神社仏閣と違って個性があると思えたからだ。

方広寺の特異性は、まず、日本三大梵鐘に数えられる釣鐘にあった。カナダから来た Katherine Baxter (1895) は、「この場所の興味的は巨大なブロンズの鐘です」(249) と述べているが、同じように考えたイギリス人

は多かったようで、方広寺の鐘が挿絵や写真つきで紹介されることはしばしばある。イギリス・バプティスト伝道会 (Baptist Missionary Society) 発刊の *The Missionary Herald* の 1888 (明治 21) 年 9 月 1 日号でも、「京都の街にある最も注目されるもののひとつで、その大きさと力ゆえに東洋の驚異のひとつである」(*The Great Bell at the Temple of Daibutsz, Kioto, Japan,* 358) という紹介文とともに釣鐘の版画 (図 1) が載せられている。ただし、その挿絵版画にあるように、釣鐘と言っても地面に置かれ、それが釣られた姿を見られたのは明治後半になってからだった。明治初めに取り壊された鐘楼が再建されたのは 1884 (明治 17) 年で、それまで方広寺の鐘は野晒しの状態だった。*The Missionary Herald* は記事当時ではなくそのころの釣鐘の版画を使っている。



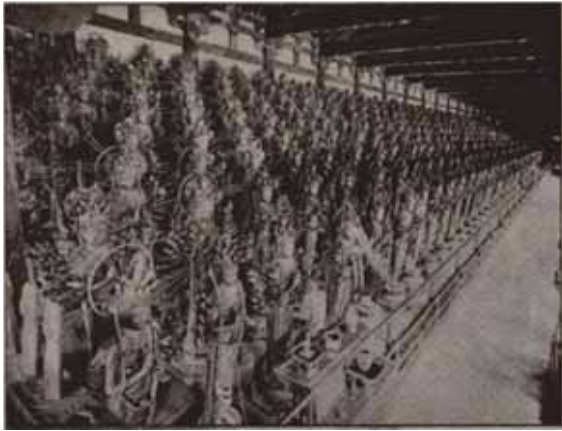
(図 1) 'Great Bell at the Temple of Daibutsz'  
(*The Great Bell at the Temple of Daibutsz,*  
Kioto, Japan' 1888, 359)

方広寺では鐘以外にも大仏像が、イギリス人旅行者の興味を引いた。ただし彼らが見たのは、江戸時代に東大寺の奈良の大仏と高徳院の鎌倉の大仏とともに日本の三大大仏に挙げられた京の大仏とはほど遠いものであった。京の大仏は、1798 (寛政 10) 年に落雷による火災のために消失し、明治時代の大仏は縮小された半身だけの像だった。だが、それでも、大仏が方広寺を観光名所にしていただろうである。先に挙げた *The Missionary Herald* の挿絵版木のキャプションに見られるように、方広寺がイギリス人から「大仏の寺」と呼ばれていたことからそれはわかる。

三十三間堂に関しては、お堂に安置されている 1001 体の観音像がこの寺を特異だと感じさせたことは容易に推測できる。Mary Bickersteth (1893) は、寺の描写とともに観音像の写真 (図 2) を載せ、この寺を「観音の寺」と呼んでいるし (154-55)、Henry Tristram (1895) は「33,333 の像」と題した挿絵 (図 3) とともに三十三



間堂を紹介している（204-207）。



(図2) 'Temple of Kwannon, Kyoto'  
(Bickersteth 1893, 155)



(図3) '33,333 Images, Japan'  
(Tristram 1895, 205)

方広寺と三十三間堂は、上述した個性ゆえに特筆すべき場所として扱われた。しかし、これらがイギリス人旅行者に与えた印象は、決して良いものばかりではなかった。その例として、国教会伝道協会による定期刊行物 *The Church Missionary Gleaner* の1887（明治20）年12月1日号の記事 'Daibutsu Temple and Bell' が挙げられる。大阪で宣教活動をしていた Charles Warren によって書かれ、方広寺を挿絵つきで紹介しているこの記事は、この寺を「かなり興味深い場所」であり「毎年全国から何千人もの人が訪れる古都京都の名所のひとつ」だと紹介するものの、「誇るべき建築上の美はなく」で「日本で見た最もお粗末な寺院のひとつ」だと評している（140）。「アングロ・インディアンの世界漫遊家 (an Anglo-Indian Globe-Trotter)」の名で旅行記を出した C. R. Sail (1892) に至っては、方広寺の大仏を「粗悪で陳腐であり、これまで一度ならず起こったように焼失

すべきだ」(123) と酷評し、三十三間堂の観音像に関しても「(中尊を囲む) 千体の観音像に美は全くない」(122) と批判している。

#### 4. 自然美を兼ね備えた寺—清水寺

清水寺の場合は、方広寺と三十三間堂のように安置物の個性ではなく、その立地ゆえに特筆すべきだと考えられたようだ。清水寺は、イギリスの有名な冒険小説家 Henry Rider Haggard の妹で、ベルギー公使夫人として1893（明治26）年から1906（明治39）年に日本に滞在した Eleanora d'Anethan (1912) が「私のお気に入り」(333) と呼んでいる場所である。彼女と同様に、清水寺を気に入ったイギリス人旅行者のひとりが画家の Walter Tyndale (1910) で、清水寺は「京都で最も魅力的な寺」(93) で、この寺の見所は山の斜面にせり出すように建てられ、巨大な支柱の根元が「緑」に隠れ、下には町並み、遠くには「青い山々」を見渡せる舞台だと言い (94)、旅行記に自らが描いた清水の舞台の水彩画を掲載している(図4)。写真家 Herbert Ponting (1910) の場合は、「東山にはほかにもたくさん寺がある。その斜面には松や楓が濃い茂みをつくり、春には森の緑を下地にした桜の花の刺繍がいたるところに見られる。このような美しい森の木陰から、少なくとも十以上の寺が顔を覗かせている。そのなかで最も大きな寺が知恩院で、最もピクチャレスクなのが清水寺である」(10) と記述している。ほかにも Kate Lawson (1910) が清水寺を「日本中で最もピクチャレスクな寺のひとつ」(229) と称し、「本堂にある木製の舞台に立って街を見渡し、真下の木々の峡谷を見下ろすと、(清水寺に続く) あの坂道を登ってくるだけの価値は十分あったといつも思いました」(229) と述べている。Henry Tristram (1895) の場合は、最も珍しく最も美しい寺院のひとつは清水寺の本堂だと言い、それを「山の切り立った斜面に寄りかかる大きな骨組みの上に建つ巨大な建造物」(207) と描写し、登山家でもあり挿絵木版画家でもあった Edward Whymper による挿絵(図5)を載せている。



(図4) 'The Judas-Tree'  
(Tyndale 1910, 92)



(図5) 'Temple at Kyoto'  
(Tristram 1895, 199)

清水の舞台には建造物としての珍しさがあつた。しかし、Tyndale や Lawson や Ponting の記述を見ると、清水寺が特筆すべき場所だと思われた理由は立地にもあつたと言える。清水寺は東山山麓に位置し、清水の舞台は東山を背に建ち、その下には錦雲溪と呼ばれる溪谷が広がっている。さらに、舞台からは京都の街並みだけでなく、京都を取り囲む山々を望むことができた。清水寺が座し、同時に、そこから見渡すことができた京都の自然は、多くのイギリス人旅行者が京都の特徴であり美点であると感じていたものだった。例えば、Eleanora d'Anethan (1912) は、「木々に覆われた丘陵

と繁茂した植物による自然美」を、京都が比類なき美しい都市である理由のひとつとして挙げている (108)。Isabella Bird (1880) の場合は、彼女の京都についての記述がその自然美を讃えることから始まっていて、このことから京都の自然美がどれほどイギリス人旅行者を魅了していたのかが窺える。清水寺は、建築上の特異さと同時に、立地ゆえにこのような自然美を兼ね備え、そしてピクチャレスクであった。そのためにイギリス人旅行者が特別な場所だと感じたのだろう。

## 5. 好立地の寺—知恩院

次は、知恩院について考えてみよう。知恩院は、Herbert Ponting (1910) が清水寺と本願寺と並ぶ「京都の主要な仏閣」(30)と呼び、工部大学校で教師を務めた William Dixon (1882) が「それだけで一冊の本が書けるだろう」(580)と言っている寺である。また、政治家である夫 Thomas Brassey と4人の子どもたち、そして船長から料理人まで30人以上のスタッフと一緒に蒸気機関つき快走帆船サンビーム号に乗って1877(明治10)年に日本にやって来た Annie Brassey (1878) は、知恩院は「これまで多くの旅行者の本のなかで丹念に描写されてきました」(341)と述べている。この言葉からも知恩院がイギリス人旅行者の著書で頻繁に言及されていたことがわかる。

そしてその理由を Brassey は、「この場所がヨーロッパ人にとって特に興味深いのは、ここが、1868年にミカドに初めて謁見した外国人使節たちの宿泊所だったから」(341)と説明している。これは1868(明治1)年3月の駐日英国公使 Harry Parkes らによる明治天皇への謁見のことを言っており、この謁見では、知恩院から御所へ向かっていた Parkes らが途中で刺客に襲われるという事件が起こった。Parkes は無事だったが、護衛兵たちが負傷したこの事件はイギリス本国でも報道され、その際に知恩院の名が新聞等の紙面に登場していた可能性は十分に考えられる。しかし、Brassey 以外のイギリス人の旅行記では、彼女が言うように Parkes の明治天皇謁見との関係で知恩院が注目すべき場所として紹介されることはない。彼女がこのように述べたのは、京都で彼女らの案内をしてくれたのが Parkes であり、彼の存在を強調したかったからかもしれない。あるいは、彼女の旅行記の京都に関する章は、Parkes の計らいで夫が神戸・京都間の鉄道の開業式で明治天皇に謁見した話から始まるのだが、この出来事を読者に想起させ、それをさらに印象づけたかったからかもしれない。いずれにしても、知恩院がイギリス人の旅行記にたびたび登場する理由は、彼女が説明したもの以外にある。

理由として考えられるのが、1872(明治5)年に開催



された第一回京都博覧会の会場のひとつが知恩院だったことである。この年に京都を訪れた外国人の旅行記では、知恩院は博覧会との関係で言及されることが多い。ただし、この年以外に京都を旅したイギリス人の旅行記ではそうではない。知恩院が注目されている主たる理由のひとつは、そこの大鐘である。知恩院の大鐘は先に挙げた方広寺と奈良の東大寺の釣鐘と並んで日本三大梵鐘と呼ばれ、これを目当てに知恩院を訪れたイギリス人は多い。シドニー大学で歴史を教えていたことのあるイギリス人著述家 Douglas Sladen (1904) はそのひとりで、彼は「京都の神社仏閣は無数」だが、それらのなかで知恩院は「言及しておかなくてはならない」場所だ (385) と言ったうえで、「世界で最も大きくて素晴らしい鐘のひとつ」として知恩院の大鐘を紹介し、その大きさや鳴らし方や音色について記述している (387-388)。An Anglo-Indian Globe-Trotter こと C. R. Sail (1892) は、京都では美術品を見る以外にもすることがあり、「その第一が知恩院の大鐘（を見ること）だ」(121) と述べている。Herbert Ponting (1910) の場合は、鐘の描写だけではなく自分で撮った写真（図 6）も旅行記に載せている。また、知恩院には鐘以外にも見所があり、Christopher Dresser (1882) が書いた日本旅行記であり日本の建築や芸術工芸の解説書でもある *Japan: Its Architecture, Art, and Art Manufactures* にも見られるように、雄大な姿をしている御影堂やその正面の軒裏に置かれている忘れ傘が描写されることもしばしばある。



(図 6) 'The Great Bell at Chion-In Temple'  
(Ponting 1910, 8)

さらなる理由としては、清水寺と同様に東山山麓に位置しているために、イギリス人旅行者がピクチャレスクだと感じたことが挙げられる。事実、William Dixon (1882) は「円山の茂みにあるというその立地」が知恩院を西本願寺よりも「より一層印象的」なものにしている (593) と語っている。124 日間で世界一周をした際に京都に立ち寄った海運業者 Ralph Leyland (1880) も、「美しく傾斜している園地に位置し、丘陵の麓にあり、急で幅の広い巨大な石階段の先にある」という「その立地は極めてピクチャレスクだ」(154) と述べている。

ただし知恩院の立地の良さは、寺院をピクチャレスクにしたという点にだけでなく、イギリス人旅行者が宿泊していたホテルからの利便性という点にもあった。京都に外国人向けの宿泊施設が現れたのは明治時代であり、中村屋が 1868 (明治 1) 年に洋間 8 室を備えたのを筆頭に、1877 (明治 10) 年には自由亭、1881 (明治 14) 年には也阿弥ホテルといった外国人向けのホテルが開設された。その後も京都における洋風ホテル需要の高まりを背景に、1888 (明治 21) 年に京都ホテルの前身である常盤ホテル、1900 (明治 33) 年に都ホテルが開業した。これらのなかで也阿弥ホテルと自由亭<sup>3</sup>と中村屋が、Satow & Hawes による *A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan* の 1884 (明治 17) 年改訂版で京都のホテルとして紹介されている (サトウ 110-111)。約 10 年後の 1893 (明治 26) 年のマレーの *A Handbook for Travellers in Japan* 改定第 3 版では、京都ホテル (常盤ホテル) と也阿弥ホテルと中村屋 (二軒茶屋) の名前が挙げられ、マレーの旅行案内書ではお薦めの宿を意味する「\* (アスタリスク)」が京都ホテルと也阿弥ホテルについている (Chamberlain & Mason 1893, 288)。1913 (大正 2) 年に出版されたマレー最終版の第 9 版では、都ホテルと京都ホテルと大仏ホテルの名が見られ、最初の 2 つに「\*」がついている (Chamberlain & Mason 1913, 313)。

1906 (明治 39) 年の 2 度目の火災の末に也阿弥ホテルが廃業したことなどにより京都を代表するホテルの顔ぶれには変化が見られるが、これらの旅行案内書に挙げられている京都の外国人向けホテルの黎明期に開設されたホテルの多くは、東山エリアにあった。例えば、京都での外国人向け宿泊施設の先駆けである中村屋は八坂神社の大鳥居前にあり、自由亭はその真向かいで開業した。也阿弥ホテルと都ホテルはそれぞれ、円山公園内と蹴上に建っていた。『京都新聞』の前身である『京都日出新聞』は 1902 (明治 35) 年 10 月から 1903 (明治 36) 年 1 月にかけて「京都と外人」を連載し、そのなかで京都の 3 つの主力ホテルを外国人宿泊者数などの点から比較しているが、京都の 3 大ホテルとして挙げられているのが

也阿弥ホテルと都ホテルと京都ホテルである。つまり、外国人向けの3大ホテルのうちの2つが東山エリアにあった。

明治時代の京都のホテルについて天野氏は、「駅前や中心部ではなく、歴史的寺社仏閣の多い東山という代表的な観光エリアに近接していた」(221)と要約している。そして、その「歴史的寺社仏閣」のなかでホテルの多くに最も近接していたのが知恩院だった。なかでも、知恩院の境内と也阿弥ホテルは接していて、そのホテルに宿泊し、知恩院を「お隣さん」として記しているイギリス人旅行者は少なくない。例えば William Dixon (1882) は、「私たちのホテルは円山の傾斜の上にあり、知恩院の境内に隣接している」(596)と言い、Douglas Sladen (1904) は知恩院を、投宿している「也阿弥ホテルのすぐ下に建っている」(385)と紹介している。カナダ人の Katherine Baxter (1895) も也阿弥ホテルに泊まった多くの外国人のひとりだが、彼女は旅行記で「京都には見るべきものがとても多いので、あちこち回って観光をしなければと思いました。ガイドブックは御所を薦めていましたが、宿泊している丘陵にあるご近所さんにきちんと敬意を払わなくてはということで、私たちは初日に知恩院を楽しむことにしました」(240)述べている。彼女と同じように、ホテルに近いという利便性から知恩院を観光場所として選び、そして知恩院について書き残したイギリス人も多かったはずだ。実際、画家 Alfred East とリバティ百貨店の創業者 Arthur Liberty とその妻 Emma らとともに1889(明治22)年に日本を観光した美術雑誌 *The Studio* の創刊者 Charles Holme は、日記に、知恩院を何度も見に行ったが、それはそこが宿泊していた「也阿弥ホテルにとっても近かった」(3)からであると記している。

## 6. 宗教的関心を集めた寺—西本願寺

2泊3日で琵琶湖への日帰り旅行を含む京都観光をした Leonard Smith (1900) は、「京都での時間は非常に限られていたので、特に有名な名所のうちの幾つかを急いで見て回ることでしかなかった」(128)。その彼が見た名所のなかで最初に挙げられているのが西本願寺である。Smith は西本願寺を「壁画と襖絵で有名である」(128)と紹介してそれらを描写しているが、彼のように西本願寺の内部装飾を記述しているイギリス人旅行者は多い。Satow & Hawes の日本旅行案内書でも、本堂や飛雲閣や白書院などの内部が西本願寺の見所として詳しく解説されていて(サトウ 131-133)、実際にそれらを見物してその絢爛豪華さに感動し、その感動を伝えようとしている者も少なくない。例えば Herbert Ponting (1910) は、西本願寺は「芸術家や古い時代の物を愛好

する人には、大いに興味を覚えさせる」寺で、特に「襖や杉戸や壁に、狩野派やそのほかの流派の傑作が描かれている」書院は「紛れもなく日本美術の最大で最高の宝庫」(25-26)だと語っている。

また、西本願寺は、内部装飾だけでなく、建造物の外観が称賛されることもしばしばある。1900(明治33)年前後に京都を訪れたイギリス人女性 Campbell Davidson (1904) は、彼女がこの寺院に惹かれた理由は「その建物の荘厳さ、その建築の優雅さと威風」(137)にあったと言い、Annie Brassey (1878) は西本願寺を「これまで見たなかで最も大きく最もすばらしい寺院のひとつ」(344)と称している。1882(明治15)年に世界一周の途上で京都に立ち寄った Hugh Wilkinson (1883) も、内部装飾だけでなく建造物自体も素晴らしく、「とにかく、私たちが見たなかで最も見事なもの」(176)だと称賛している。さらに、西本願寺には、Isabella Bird (1880) が「これまで日本で見たなかで最も見事な庭園」(242)と呼んでいる滴翠園があった。西本願寺をイギリス人旅行者が特別と感じた理由は、その建造物の内部装飾や外観や庭園の素晴らしさにあったと言える。

しかし、西本願寺が京都のあまたの神社仏閣のなかで特別な場所として扱われたのには別の理由もあった。それは、西本願寺が浄土真宗(より正確には浄土真宗本願寺派)の総本山であることだ。浄土真宗、または真宗は、数多くある日本における仏教宗派のなかでも、イギリス人による日本案内書や旅行記で言及されることの多い宗派である。それについて、William Dixon (1882) は「最も広く受け入れられて最も裕福であるだけでなく、最も開化した宗派」(589)だと解説している。Isabella Bird (1880) は、「最大の宗派ではないとしても、知、力、富において一番で、その勢いを上げ、外国式の神学校を組織しています」(2: 236)と紹介している。続けて Bird は、「西本願寺大教校」のことであるその神学校を以下のように説明している。

ここでは神道とキリスト教だけではなく仏教信仰の腐敗を阻止し攻撃することができるようにと、仏教学と西洋学が教え込まれています。その教育のために、今も京都では新しい学校が建てられており、素晴らしい設備が整えられるそうです。若い僧侶たちをイギリスに送って梵語を学ばせ、反キリスト教論を身につけさせて自らを強化する予定です。そしてこの精力的な宗派がその日にむけて僧侶を鍛えているのは、京都でだけではありません。(Bird 1880, 2: 236-237)

ここで Bird は浄土真宗とキリスト教との関係に触れて



いるが、同様の記述はほかのイギリス人の著述にもたびたび見られる。そのひとつが、女性宣教師の Emma Pitman (1882) の著書 *Central Africa, Japan and Fiji: A Story of Missionary Enterprise, Trials and Triumphs* のなかの 'Japan and the Japanese' である。これは旅行記ではなく、宗教を中心とした日本の歴史や生活の紹介と日本でのキリスト教布教状況の報告ではあるが、そのなかで Pitman は、「いつの日かヨーロッパを自分たちの信仰に改宗させるという望みにふけ、京都に 600 人の学生を教育できる大きな学舎を持ち、その学生のなかにはヨーロッパやアメリカで宣教師として活動する予定の者たちがいる」(119) 仏教の宗派だと、批判的な口調で浄土真宗を説明している。このように浄土真宗は、明治日本において宗教的に強い力を持つ仏教宗派であり、同時に、反キリスト教の急先鋒としてイギリス人に認識されていた。だとすれば、その総本山である西本願寺が、宣教師を筆頭とする日本の宗教に関心を持つイギリス人の注目を集めたのも当然だろう。

イギリス人のなかには宗教的関心から西本願寺に赴いた者たちがいた。そして彼らがそこで望んだことは、建物や内装や庭園を見て回る以上のことだった。それは僧侶との面談であり、このことは、「住職が不在だったのはとても残念だった」(344) という Annie Brassey (1878) の言葉からもわかるだろう。彼女は「最も急進的な仏教の宗派である浄土真宗」に属し、野心的な自分たちの布教の展望を「イギリス人訪問者たちに語って聞かせてきた」西本願寺の僧侶に会うことを期待していた (344)。

Brassey の旅行記では人物の名前が明記されていないが、西本願寺にはたびたび外国人の訪問を受けた有名な僧侶がいた。その僧侶とは赤松連城である。William Dixon (1882) は旅行記のなかで、「京都の西本願寺の僧侶のひとりで、流暢に英語を話し、ヨーロッパをたくさん旅したことがあり、そこでキリスト教について学んだ紳士」として赤松連城を紹介し、さらに彼による浄土真宗の教義や信条の概説を載せている。Isabella Bird (1880) も彼を次のように紹介している。

（日本の精神的な力としての仏教を新しく改革し再編することを目的とした浄土真宗の動きの）先頭にいるのが赤松氏で、彼はすぐれた知性、高い教養、不屈の精力、高い知名度、自分の信仰の将来に対する遠大な志を持った僧侶です。彼はイギリスで何年かすごし、梵語とキリスト教を学び、京都の日本人には「英語を話すお坊さん」として有名です。de Saumarez 氏が紹介状を書いて、西本願寺に行くと彼に会いなさいと英語で書いたメモをくださいました。(Bird 1880, 2: 237)

Bird は実際に彼と面会し、仏教、神道、キリスト教に関する宗教談話を行っている。Bird の約 2 年前に西本願寺を訪れた Christopher Dresser (1882) も「英語が上手な僧侶」(143) こと赤松連城に会い、Bird と同様にその時の様子や談義の内容を記している。赤松連城は、宗門の教育機関の整備をはじめとする仏教界改革に取り組んだ浄土真宗本願寺派のなかでも気鋭の僧侶であり、明治初期に島地黙雷とともに仏教界を牽引した人物だった。宗教的関心から西本願寺に足を運んだイギリス人にとっては、この僧侶こそが西本願寺の呼び物だったのかもしれない。

## 7. 明治日本の仏教信仰の現状を象徴する寺—東本願寺

最後に考察するのは東本願寺である。明治時代に京都を旅したイギリス人の旅行記には東本願寺が頻繁に登場するが、一瞬それは奇妙に思われる。というのも、明治末期まで東本願寺は再建途中だったからだ。「火出し（ひだし）本願寺」と呼ばれていたとも言われる「東（ひがし）本願寺」は何度も火災に遭っており、1864（元治 1）年のいわゆる「どんでん焼け」でも罹災した。その際に建造物の多くが焼失し、それらは明治時代に再建された。主要建造物について言えば、御影堂と阿弥陀堂は 1880（明治 13）年起工で 1895（明治 28）年再建、御影堂門は 1907（明治 40）年起工で 1911（明治 44）年再建である。

それにも拘らず東本願寺がたびたび登場する理由は、Walter Dickson (1889) の 1883（明治 16）年から 1884（明治 17）年までの日本滞在記録 *Gleanings from Japan* にある次の言葉から推測できる。その旅行記には、東本願寺は「国の宗教としての地位を奪われ、基本財産を没収された仏教が自らの手で何をできるのか」を見せてくれると書かれている (290)。東本願寺は、日本の仏教の現状を体現する場所だと見なされていたのだ。そしてこれが、建物自体は再建途中にあるにも拘わらず、東本願寺が注目された理由である。

イギリス人旅行者は、再建中、あるいは、再建されたばかりの東本願寺を明治日本の仏教信仰の様を象徴するものとして観察した。ただし、彼らが感じたことは決して同一ではない。ある者は、そこに仏教衰退の証を見た。例えば、敬虔なキリスト教徒である Mary Bickersteth (1893) は、「イングランドに戻ってから、私たちはこの寺の名前を日本の仏教が勢力を取り戻した証拠として耳にしてきました。しかし実際は、それは仏教衰退のとても明らかな証拠なのです」(142) と述べている。そのように言える理由として彼女は、寄付が集まるのに時間がかかったことや寄付のほとんどすべてが日本のごく一部の地域からであることを挙げている (142-143)。御影

堂と阿弥陀堂が完成するかなり以前に京都を訪れたと思われる William Barneby (1889) も、再建にかなりの時間がかかることと「仏教は衰えてきていると言われている」ことには関係があると示唆している (213)。

彼らとは対照的に、完成間近の御影堂と阿弥陀堂を目にしたであろうカナダ人の Katherine Baxter (1895) は、「このような巨大建造物を建てるという国民たちによってなされたこの事業が示すように、仏教は素晴らしい復活を遂げたのです」(276) と述べている。さらに、東本願寺の再建が全国各地の様々な身分の人々からの金銭や労働や物資の提供のおかげであることを強調し、Bickersteth の見方に反論するかのように、「このような仕事を目の前にして、仏教が死にかけているなどと誰が主張できるでしょうか？」(277) と言っている。Baxter よりもずいぶん前に東本願寺を見物したイギリス人のなかにも、彼女と同じ感想を持ったものがある。そのひとりが、東本願寺は仏教の現状を示すと言った Walter Dickson (1889) で、彼は自身が観察した再建工事の様子を記述しながら、日本人の仏教への信仰心が失われていることを伝えようとしている。そして、工事作業現場で見た寄進された女性たちの髪の毛で作られた引き綱を、その最たる証として挙げている (290-292)。William Dixon (1882) の場合は、東本願寺の再建に仏教全体と言うよりも「真宗の持つ多大な力」(516) を感じたようだ。Henry Tristram (1895) も同様で、「仏教全体の衰退についての意見はどうであろうとも、裕福な者からだけでなく貧しい者からも、そして全国の至る所から自発的に提供されるものから判断すれば、本願寺の宗派には確かに活気と熱意がある」(202) と述べている。特に、引き綱を作るために「25 万人の女性」が髪の毛を寄進したことは、人々の「宗教的情熱」を端的かつ強烈に伝えていると考えている (203)。

#### まとめ

以上、本論では、明治時代に京都を旅したイギリス人の旅行記に 6 つの寺院一方広寺、三十三間堂、清水寺、知恩院、西本願寺、東本願寺一が頻繁に登場する理由を考察した。方広寺と三十三間堂が特別だと考えられた理由は、それらの安置物の個性にあった。清水寺は、多くのイギリス人を魅了していた京都の自然美を兼ね備えており、そのゆえにピクチャレスクな場所としてイギリス人旅行者の美意識を刺激した。清水寺と同じく東山山麓に位置する知恩院もピクチャレスクな魅力を持っていたが、同時に、その立地の利便性が多くのイギリス人旅行者をそこに立ち寄らせた。西本願寺に関しては、日本美術の素晴らしさを見せつける場所だっただけではない。東本願寺と並んで、キリスト教徒を中心としたイギリス

人の宗教的関心を集めた場所だった。そしてこれら両本願寺への関心のあり方や見方には、イギリス人旅行者の宗教、特に仏教とキリスト教に対する思いや考え方の違いによる相違があり、とても興味深い。このように 6 つの寺々が特別視された理由は様々だが、それらは明治時代のイギリス人旅行者の京都での旅のあり様や彼らが京都に求めたものを反映していると言えるだろう。

#### 注

1. 本論文は、平成 25 年度科学研究費基盤研究 (C) 「明治時代の京都を訪れたイギリス人の京都観とその思想的背景に関する比較文化研究」(課題番号 25511007 研究代表者: 野口祐子) の成果の一部である。
2. 本論文では、Earnest Satow & Albert Hawes による *A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan* の 1884 (明治 17) 年改定版に、その翻訳であるアーネスト・サトウ編著・庄田元男訳『明治日本旅行案内 (上・中・下)』を使用する。
3. 『明治日本旅案内』では「重亭」と訳されているが、「自由亭」の誤りである。

#### 引用文献

- 天野太郎. 「外国人向けホテルの黎明」. 『みやこの近代』. 丸山宏・伊徒勉・高木博志編. 思文閣出版, 2008. 220-221. Print.
- An Anglo-Indian Globe-Trotter. [C. R. Sail]. *Farthest East, South and West: Notes of a Journey Home through Japan, Australasia and America*. London: W. H. Allen & Co., 1892. Print.
- Barneby, W. Henry. [William Henry Barneby]. *The New Far West and the Old Far East: Being Notes of a Tour in North America, Japan, China, Ceylon, Etc.* London: Edward Stanford, 1889. Web. 27 Nov. 2014.
- Bates, E. Katharine. [Emily Katharine Bates]. *Kaleidoscope: Shifting Scenes from East to West*. London: Ward & Downey, 1889. Web. 27 Nov. 2014.
- Baxter, Katharine Schuyler. *In Bamboo Lands*. New York: Merriam Company, 1895. Web. 27 Nov. 2014.
- Bickersteth, M. [Mary Bickersteth]. *Japan as We Saw It*. London: Sampson Low, Marston, & Company, 1893. Web. 27 Nov. 2014.
- Bird, Isabella Lucy. *Unbeaten Tracks in Japan: An Account of Travels in the Interior, Including Visits to the Aborigines of Yezo and the Shrines of Nikko*

- and *Isé*. 2 vols. Cambridge: Cambridge UP, 2010. Print.
- Brassey, Mrs. [Annie Brassey]. *A Voyage in the 'Sunbeam': Our Home on the Ocean for Eleven Months*. London: Longmans, Green, & Co., 1878. Web. 27 Nov. 2014.
- Chamberlain, Basil Hall & W. B. Mason. *A Handbook for Travellers in Japan*. 3<sup>rd</sup> ed. New York: Charles Scribner's Sons; London: John Murray; Yokohama, Shanghai, Hong Kong & Singapore: Kelly & Walsh, Limited, 1893. Print.
- . *A Handbook for Travellers in Japan Including Formosa*. 9<sup>th</sup> ed. New York: Charles Scribner's Sons; Yokohama, Shanghai, Hong Kong & Singapore: Kelly & Walsh, Limited, 1913. Web. 27 Nov. 2014.
- Crow, Arthur H. *Highways and Byeways in Japan: The Experiences of Two Pedestrian Tourists*. London: Sampson Low, Marston, Searle, & Rivington, 1883. Web. 27 Nov. 2014.
- D'Anethan, Baroness Albert. [Eleanora d'Anethan]. *Fourteen Years of Diplomatic Life in Japan: Leaves from the Diary of Baroness Albert d'Anethan*. London: Stanley Paul & Co, 1912. Web. 27 Nov. 2014.
- Davidson, Augusta M. Campbell. *Present-Day Japan*. London: T. Fisher Unwin, 1904. Web. 27 Nov. 2014.
- Dickson, W. G. [Walter G. Dickson]. *Gleanings from Japan*. Edinburgh & London: William Blackwood & Sons, 1889. Web. 27 Nov. 2014.
- Dixon, William Gray. *The Land of the Morning: An Account of Japan and Its People, Based on a Four Years' Residence in That Country Including Travels into the Remotest Parts of the Interior*. Edinburgh: James Gemmell, 1882. Web. 27 Nov. 2014.
- Dresser, Christopher. *Japan: Its Architecture, Art, and Art Manufactures*. London: Longmans, Green, & Co., 1882. Web. 27 Nov. 2014.
- 'The Great Bell at the Temple of Daibutsz, Kioto, Japan.' *The Missionary Herald*. 1 Sep. 1888: 358-359. Print.
- Holme, Charles. "The Diary of Charles Holme's 1889 Visit to Japan and North America." *The Diary of Charles Holme's 1889 Visit to Japan and North America with Mrs Lasenby Liberty's Japan: A Pictorial Record*. Ed. Toni Huberman, Sonia Ashmore & Yasuko Suga. Folkestone: Global Oriental LTD, 2008. 1-105. Print.
- 堀博・小出石史郎訳. 『神戸外国人居留地—ジャパ・クロニクル紙ジュビリーナンバー』. ジャパン・クロニクル編. 神戸新聞出版センター, 1980. Print.
- Jerningham, Sir Hubert. *From West to East: Notes by the Way*. New York: E. P. Dutton & Company, 1907. Web. 27 Nov. 2014.
- Knollys, Henry. *Sketches of Life in Japan*. London: Chapman & Hall, 1887. Web. 27 Nov. 2014.
- 「京都と外人（九，十一，十三）」. 『京都日出新聞』1902年10月16日：3；1902年10月20日：2；1902年10月24日：3. Print.
- Lawson, Lady. [Kate Lawson]. *Highways and Homes of Japan*. London: T. Fisher Unwin, 1910. Web. 27 Nov. 2014.
- Leyland, R. W. [Ralph W. Leyland]. *Round the World in 124 Days*. Liverpool: Gilbert G. Walmsley, 1880. Web. 27 Nov. 2014.
- 丸山宏. 「近代ツーリズムの黎明—「内地旅行」をめぐって—」. 『十九世紀日本の情報と社会変動』. 吉田光邦編. 京都大学人文科学研究所, 1986. 89-112. Print.
- Pitman, Emma Raymond. *Central Africa, Japan, and Fiji: A Story of Missionary Enterprise, Trials, and Triumphs*. London: Hodder & Stoughton, 1882. Web. 27 Nov. 2014.
- Ponting, Herbert G. *In Lotus-Land Japan*. London: Macmillan & Co., 1910. Web. 27 Nov. 2014.
- サトウ, アーネスト編著. 『明治日本旅行案内 上巻・中巻・下巻』. 庄田元男訳. 平凡社, 1996. Print.
- Sladen, Douglas. *Queer Things about Japan*. London: Anthony Treherne & Co., 1904. Web. 27 Nov. 2014.
- Smith, Leonard Eaton. *West and by East*. New York: Knickerbocker Press, 1900. Web. 27 Nov. 2014.
- Thomas, J. LL. [Joseph LL. Thomas]. *Journeys among the Gentle Japs in the Summer of 1895*. London: Sampson Low, Marston & Company, 1897. Web. 27 Nov. 2014.
- Tristram, H. B. [Henry B. Tristram]. *Rambles in Japan*. London: The Religious Tract Society, 1895. Web. 27 Nov. 2014.
- Tyndale, Walter. *Japan & the Japanese*. New York: Macmillan, 1910. Web. 27 Nov. 2014.
- Vincent, Lady (Howard). [Ethel Vincent].

*Newfoundland to Cochin China by the Golden Wave, New Nippon, and the Forbidden City.* London: Sampson Low, Marston & Company, 1892. Web. 27 Nov. 2014.

Warren, C. F. [Charles F. Warren]. 'Daibutsu Temple and Bell.' *The Church Missionary Gleaner*. 1 Dec. 1887: 139-140. Print.

Wilkinson, Hugh. *Sunny Lands and Seas: A Voyage in the SS. 'Ceylon,' Notes Made During a Five Months' Tour*. London: John Murray, 1883. Web. 27 Nov. 2014.